

夏季合宿観察会のお誘い

今年も昨年に続き、涼しい清里の“小平市山荘“に集います。ふるってご参加下さい。
尚、先月の例会、メールでは展開済で、既に多くの方から、参加申込を頂いております。
山荘は予約済ですが、未だ若干の余裕があります。
締め切りが迫っていますので、申込される方は、至急企画幹事まで連絡下さい。

記

- ・ 宿泊；清里の小平市八ヶ岳山荘
- ・ 日付；8月2日（土）～3日（日）
- ・ 会費；3,500円（1泊2食、懇親会費用、除く交通費）予定
- ・ 申込；至急、企画役員まで。

要領は昨年と同様です。原則、現地集合、現地解散ですが、必要に応じ、乗り合せ配車を幹事が調整致します。

8月2日、午後5時までに小平山荘集合です。6時からの夕食（食堂にて）後、別室にて懇親会を行います。

多摩虫企画担当、北川；042-255-4190、仲西；03-3397-5412、早坂；045-823-4430、小柴；042-327-4321

虫と自然を愛することへの普及と指導についての考え方？

最近虫を採ったり集めたりするのはけしからんという風潮が強い、これは本当に自然や虫を知らない人の言うことであると思う、何でも目のあたりにし身近でみることからそれを知り科学の世界に1歩ふみいれるという初めを否定することになるからである。そして勉強漬けや競争の仕組みばかりが強調され家にこもりっぱなしやゲーム漬けの孤独なオタクがいっぱい出てきて制御のできない人間が増えてきている。あたかも錦のみはたのようにキレルといえれば何でも許されるという勘違いに気づかず秋葉原事件のようなものが続発傾向にある。

大自然の中を駆け巡り虫と遊ぶという原始時代からの自然の癒しと恩恵を忘れてはならない。最近はその初めの1歩さへ否定する恐ろしい時代となってきた。われわれ虫好きの中でも将来への継承という名のもとに保護、採集禁止ばかりを叫び（それ自体は悪いことではないが…）あまりにも数と地域が増えすぎて自分の首を絞める状態になりつつある。どういう形にしても消滅ということも自然の摂理である、考え方によっては標本として残っているのであれば良しとする必要もあるかと思われる。しかし国としての文化的関与が

望めないとすれば、50万箱プロジェクトのようなおのずと自衛策の一つの手として考えなければならなくなってきたのも事実である。

日本自然保護協会（行き方、やり方の違いからアレルギーを示す虫屋もいるが？）の自然観察指導員として何回も子供たちとフィールドで一緒に遊び指導する機会を持ったが、いつも子供たちは自然界のものに触れると目がらんらんと輝きいきいきとして本当にのびのびとした子供らしい顔つきとなり見ている者たちも楽しくなってくる。回を重ねるとこうでなくちゃと思う。保護や採集禁止で次代への継承などというのは何かちっぽけなことと思えてくる。なんであれ子供たちは1枚の葉っぱ、1頭の虫がいればよいのだ、種類や珍しさは関係ないのである。

まえがきが長くなったが、要は採集や撮影などで自分たちの道をゆくのは結構だし大いに楽しみ活動してもらいたいものであるが、ほんのちょっとした機会や時間を割いて子供たちに自然と虫へ触れる楽しみを教えてやってほしいと思うし、われわれに課せられた使命のひとつだともおもっております。幸い当会でも花屋さんとのタイアップによる昆虫教室開催（仲西周二氏）地域自然愛好者団体とともに昆虫標本展示会、学習会、自由研究相談等による世田谷区烏山地区の昆虫観察指導を開催する（木下隆方氏）等少しずつではあるが新しい気運が盛り上がってきたのは嬉しいことである。どんどんチャレンジし次代の子供たちに夢を与えてもらいたいと思う。

他にこんなことをやっていますというかたがおりましたらメール他では是非ご連絡ください。

* 新入会員（8人目の女性会員です、よろしくお願ひいたします）

〒177-0032 津久井優子 練馬区谷原 4-17-15 T.F: 03-6760-0234

ML:tsukui-yuko@mail.707.to

* メールアドレス変更

富尾晃正 TerumasaTomio@aol.com

* 会報51号は諸般の事情により8月中旬頃の発行になるかと思ひます。ご迷惑掛けますが今しばらくお待ちください。

* 8月例会は会場の都合により中止（前述の書き観察合宿のみとなりま）9月例会は第四火曜日の9/23で昆虫写真家の渡辺康之氏をお招きし楽しいお話をしてもらひ予定です。ふるってご参加ください。

* 新聞紙上より

話の港

W: 日本原生動物学会会長を務める山口大の藤島政博教授(57)が、全国の中学、高校を対象に、

研究用として培養している原生動物「ソウリムシ」



08.4.9読売(9)
写真、藤島教授提供
の無償提供を始める。

W: 藤島教授は捕獲可能な25種類のうち24種類を培養している。「生き物を見た感動と不思議さを味わってほしい」と余ったソウリムシを生きた教材として学校に寄贈することを思い立った。

W: 約6000匹と餌のバクテリアを試験管に入れ、培養方法の解説書も添え、6月から希望する学校に発送する。送料は学校側が負担。申し込みは、メールで藤島教授 (fujishim@yamagu.chi-u.ac.jp) へ。

小川のせせらぎ。揺らめくいくつもの光。ホタルを初めて目にしたのは、母の実家のあった福島県大熊町。物心ついたばかりだった。「まあきれい」。母はうっとりしていたが、自分には怖いだけ。なぜなら昼間、じいちゃんに「教わったから。「ありゃ、死んだ人の魂が光ってるんだべ」阿部宣男さん(52)は大学を中退して板橋区職員に。1989年、区の植物園で草花の世話をしていたころ、転機が訪れる。区がホタルの飼育に乗り出すことが決まり、上司に呼ばれた。「きみ、やってよ」。自治体がホタルを育てるなど当時聞いたことがない。まして緑も水もない都会の片隅で、どう育てるといふのか。ひどく困惑する。「よりによって、あんな気

東京ホタル 光の舞

08.4.11読売(9)



20年近くにわたりひとりひとりでホタルを育ててきた阿部宣男さん。人工せせらぎも独自開発した(東京・板橋区で) 一林陽一撮影

味の悪いものを」

◆ 気が進まないながらも、出向いたのは大熊町の小川。水辺の苔の中に金色のつぶつぶを見つけた。「卵だ」。苔ごとむしり取って

持ち帰り、温室の小川に放した。だめなら区のお偉いさんもあきらめるだろう。不謹慎にもそんな期待をした。ところが「何か、もそもそ動いてますよ」。来園者が告げる。

卵がかえり幼虫がはい始めたのだ。翌年の夏、光が舞う。「東京でホタルとは」。たちまち評判が広がり夜の公園がスタート。たまたま環境が合ったのだろう。汗もかかず、努力もしていないのに、拍手喝采の中にいた。

感情に取りつかれる。それからは益も正月もなく、研究漬け。生態、環境を詳しく調査し、安定的に繁殖させる術を次々に発見していく。3年前には、ホタルの光が人にもたらず癒やし効果について論文を書き、博士号も取得した。ホタル博士の元では今、数万匹のゲンジとヘイケが羽化を待つばかりだ。土日も一人で出勤、世話を欠かさない。祖父の声はもう遠い昔。いつしか、「ホタルさん」と親愛を込めて呼ぶようになった。(おわり)

◇ このシリーズは、社会部・清水純一、金杉康政、大木隆士、滝下晃一、堀江優美子、足立大、吉良敦枝、地方部・加地永治、西部社会部・玉城夏子が担当しました。

完訳 ファーブル昆虫記

ジャン=アンリ・ファーブル著

SOUVENIRS ENTOMOLOGIQUES



晩年のファーブル
MUSEE J.H.FABRE所蔵 ©海野和男/集英社



評・福岡伸一

しん東子学書物
おかしな著者など
ふくおか生まれの
いち都生者、教授と
京都生物学大の
生院に『生物だ』
のあいだ

反骨が生んだ魂の記録

奥本大三郎による精密な現代語訳によってここに豪華で画期的な新・ファーブル昆虫記が登場した。こんな驚沢な全訳はこの先二度と現れまい。
ファーブル昆虫記を日本で初めて翻訳したのは大杉栄である。彼は心からファーブルを気に入り、獄中生活を利用して自由闊達な翻訳を開始した。訳者の序には全巻を訳す意気込みが表明されている。大正12年（1923）、憲兵隊による惨殺がそれを未完とした。ファーブルのもつ何が、この無政府主義者を捉えたのだろうか。

「あなた方は研究室で虫を拷問にかけ、細切れにしておられるが、私は青空の下で、セミの歌を聞きながら観察しています。あなた方は薬品を使って細胞や原形質を調べておられるが、私は本能の、もっとも高度な現われ方を研究しています。あなた方は死を詮索しておられるが、私は生を探っているのです」（第2巻上）
ここに鮮やかに宣言されているように、ファーブルは、当時すでに進行しつつあった要素還元主義的な生命観に真っ向勝負を挑んだ。おそらくそれが大杉栄の精神に共振したのである。
ファーブルは、当時、提出されたばかりのダーウィン説にも全く写していない。つまりファーブルは一貫して時代の批判者だった。そして同時に新しい方法論の創造者でもあった。構造や理論を排し、徹底的な観察によって記述を積み上げる。それでいて総合化や一般化をも自らに禁じる。

その力強くも静けさに満ちた魂の記録が「昆虫学的回想録」（原題）なのだ。
それゆえに、ファーブル昆虫記のほんとうの面白さは、昆虫の奇妙で精緻な生態自体はもちろんのことだが、その合間の章に挟まれた感慨の粒たちと残照の深い影にこそある。
ちょうど刊行がなされた第6巻上では、ファーブルが自らの幼少期を振り返り、自分がいかにして小さな観察者として出発したかがみずみずしく語られる。太陽の光を感じるの目は口か。目を閉じ口を開けるとその逆を繰り返した実験。スープに浸すパンを切

り分ける祖父しか触れることのないナイフ。草むらの中の音のありかをつきとめるため固く殺した息ザリガニを追った小川。
この新版にかける訳者たちの工夫と配慮は徹に入り細を穿つ。昆虫画家見山博による美しい挿絵、海野和男と今森光彦の見事な生態写真。歴代のファーブル訳者を大いに悩ませた、類出する虫や植物の名前の適切な処理。ツユムシのすだく声、*insecta*は、日本の音として「スイン、スイン」と訳される。若き日のファーブルが買って愛読したという無名の詩人ルアルは、訳注において、探し出された原詩と翻訳が示され、おまけに東京・根津にある同名のベーカーリーにまで記述が及ぶ。奥本はファーブルを愛し、その愛はとどまることを知らない。
最晩年、ファーブルはこう述懐する。
「なつかしい小川よ、冷たく、澄んだ静かな流れよ。あれから私は、とどろくと流れる大河を見た、広大無辺の大海を見た。しかし私の想い出の中では、お前という小さなせせらぎに優るものはない。貴いお前こそは、私の心に最初に印象づけられた聖なる詩なのだ」（奥本著「博物学の巨人ジャン・ファーブル」から、後の巻に収録予定）
おそらく奥本の遠い記憶の中にも同じせせらぎが煌いていないに違いない。そしてファーブル昆虫記を愛するであらうすべての読者の中にも。

◇Jean-Henri Fabre 1819-1905
1905年。仏の博物学者、中学教師退職後の55歳から30年間の記録を『昆虫記』にまとめた。



集英社 各2800円

※第1巻上・第6巻上の計1冊が既刊。第10巻下まで計20冊で完結。